



實古老子
古

13
638
2



門 へ 13
號 638
卷 2

曾 5
438
之

都

都老子卷二目錄

梅^つ兩^り諸^{しよ}說^{せつ}之^の章^{ぢやう}
鷄^{けい}烏^う問^{もん}答^た之^の章^{ぢやう}
胡^こ椒^{せう}非^ひ木^{ぼく}之^の章^{ぢやう}
祇^き園^{えん}瓦^ゐ紋^{もん}之^の章^{ぢやう}
雷^{らい}火^か電^{でん}光^{くわう}之^の章^{ぢやう}
富^ふ士^し鹽^{えん}尻^し之^の章^{ぢやう}

御堂

都老子

卷二

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

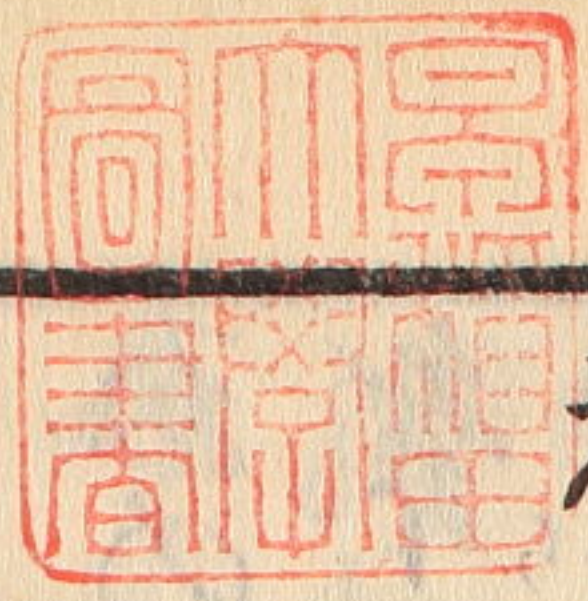
都老子卷二

黎春先生銓評

東都

名張湖鏡

編著



梅兩諸説之章

夏のに梅あといふ事。つりて。曆小を記したる
ぬまども。その時候日限さ。いふ知りが。いふ
こ。いふ善と考。小。荆楚歳時記。曆府通書。初学
記。四時纂要。神樞碎金録。三元歸正。埤雅。五雜
組。本草綱目。小乃説。少。いづの。善。い。あ。い。づ。き
と。是。こ。せん。や。曆。小。ハ。ハ。象。説。不。志。了。い。五。月。の

節の後物乃壬の日小入毒と記せり。中尊小六月
 乃節の初て壬の日梅をたといふも曆に梅を
 先師を考ふるに。いつを利ひんやと尋ひるに
 先生のいづく梅を説のふかぎらず。ち事乃
 上ふれ法説多き有り考ねふに利ひるを
 た系十色乃書物信も是極なり。いづも北
 なるべし。いんこかき。梅を名付て弟也あり。或
 西のこほまゝ事。曆小志記せる日限とたれど
 年つら。又もやと歳あり。そ國に舟つらておつ
 の遅速有。海に田家乃俗説ふ。案はむの落る

時分を法ゆと定め。又蜀葵の花は咲初らり。咲
 初らるるの事と梅を定め。又梅の實熟すと。黄を
 み落んする頃と法ゆとた。今時入俗説は
 是れい多く説ある。古人の説多きも理なり。先
 物の理と辨せん。ちるさ。ら入ると云ふ。さといふべ
 し。ま。名目と梅をいふ。そ。初梅の事。ら
 急付るる。と見え。ち。故。梅のまを。さ。落る。は。を
 梅。と。い。ふ。説。是。に。を。一。唐。少。を。法。ま。ら。を
 ち。び。あ。ま。は。や。江。南。の。所。少。は。三。月。の。一。日
 露。雨。と。梅。と。云。徐。州。淮。州。日。て。ら。七。月。の。日

梅雨とつづ。その雨とつづの年々にくまらぬ海りたる
 事何とぞと云ふ。わづらふ。暦は月日あり。然
 らどし我。算術。丹。てたが。あ。り。と。ま。す。一。風。雨。霜
 雪。此。程。の。何。ん。が。一。定。あ。る。事。何。ん。や。又。按。丹。丹
 生。山。田。又。京。都。鳥。丸。中。立。賣。同。大。体。も。門。前。を
 走。る。も。梅。雨。の。頃。地。は。正。あ。る。あ。る。事。何。ん。や。忘。る
 事。あ。ま。り。こ。の。り。不。業。依。も。去。六。却。て。理。ふ。を。む。事
 然。り。と。何。ん。が。暦。何。ん。が。妻。細。小。算。術。を。記。せ。る。也
 八。分。を。去。る。も。今。度。不。利。に。時。憲。暦。の。日。を。利

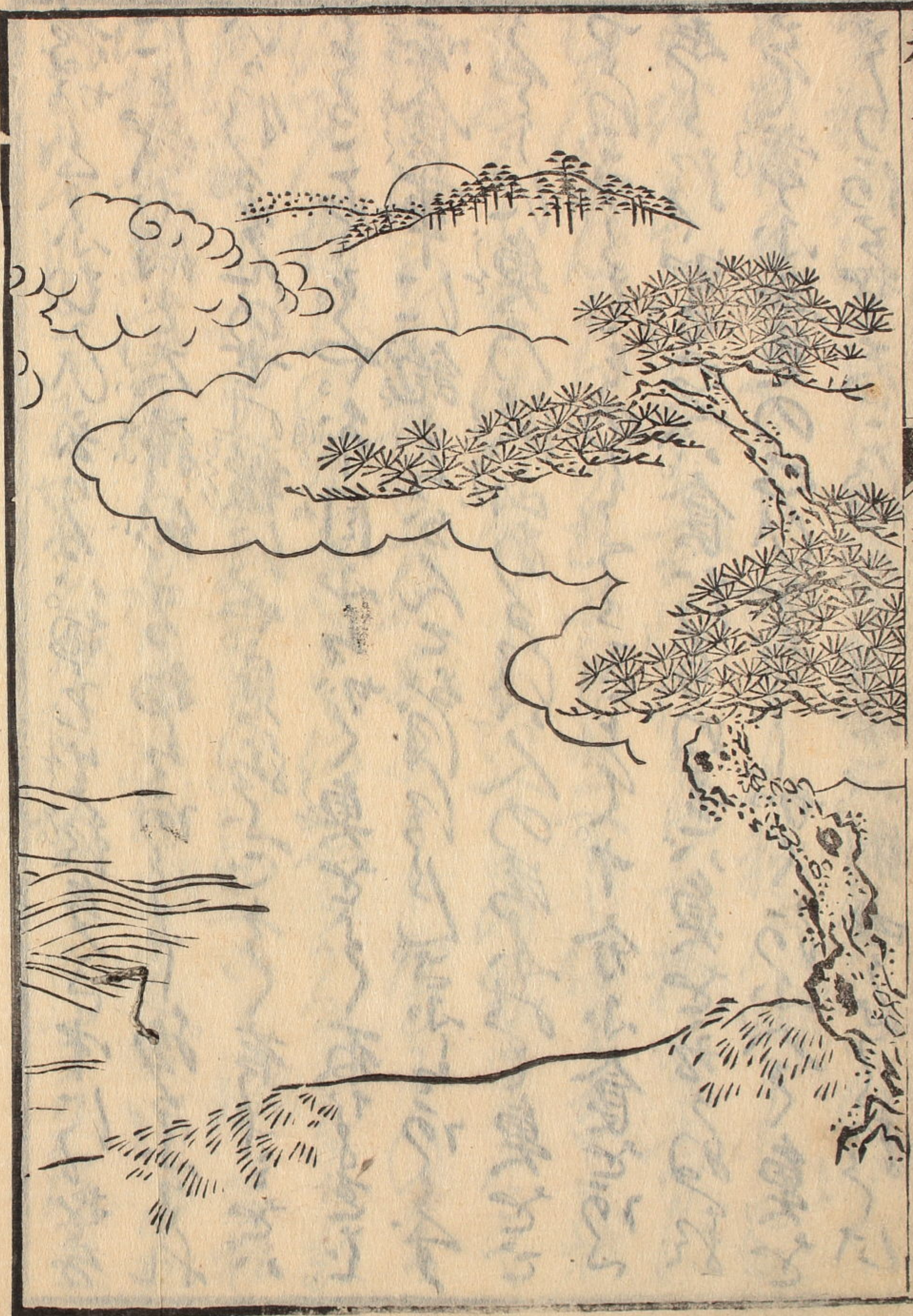
ゆ。り。貞。享。暦。と。較。ら。る。不。氣。節。一。二。日。乃。お。後。あり。
 い。つ。ま。り。是。成。事。を。知。ら。ぬ。後。ま。ど。も。西。土。日。本。一
 二。日。の。遠。く。て。耕。作。乃。さ。あ。げ。い。も。か。ら。ぬ。人。の。の
 各。函。の。害。に。を。な。さ。さ。る。事。を。知。ら。ぬ。事。

鴉鳥問答之章

岩。嶽。と。い。ふ。所。に。海。ら。り。け。れ。り。あ。り。あ。は。日。も。さ。が
 海。ら。り。る。こ。の。主。部。の。人。あ。ま。を。務。業。事。を。し。何。ん
 あ。ら。ん。志。し。い。れ。不。務。を。つ。り。ひ。真。誠。を。業。何。ん
 こ。を。か。ん。部。不。わ。づ。し。う。か。ん。と。て。舟。催。ひ。一
 々。不。我。を。さ。り。何。ん。ひ。か。り。る。不。業。及。一。あ。も。海。さ

甲 鴉乃ひまはく 巢と五阿りふぬ。たぐひやく
 をありりる。志たぐひ 鳴りくふ 鴉乃咽らり吐か
 せ成とて。何とやら 哀情たえりて 鴉乃高に
 むひんんらつらつとさふをあべー。休まきさ然
 もあまらるるを体びぬーといハりの男ささばさて
 鴉とハあま。舟とるる 奇あまらるるささひらら
 に。乃 鴉上の方とえんく何とやら 何とやら
 声とあーく 鳴りくふ上ととんれハハハ 延き松
 の枝小鳥の海り居りるふ。おまふを枝阿りる。
 一まわりくじささり切かと。耳とすめりてすくたす

鴉がくすふむひ云らる。相と生観多中にも我を
 たと秋不付と大狝似る物ら何とやら 鴉乃これ
 いのちの先の世に報にや。見病ふごとく 葉一とをバ
 もるにやとどや。不目少らかく 巢とさく取なまを
 喰食車に飽ちかんとを何はし。さふら何とす
 るに巢乃は山あるは人の為ふれと巢とさ
 甲のささるるものをささるとし。十分小食をゆ
 あり鴉かとの。食たらりぬき。巢とさくぬれ
 きて 巢小ふさのさひとさかーかく 何ふ今と巢を
 とり何と我を春に海んとすき。則吐くせくたす



事あり。もとむら。もしも我らの後すたぬ
 ものと思ふ。小児の疳ら。病は薬なりて
 伝ふらむ。せし。にや。我、昔は小児の疳を
 類ふ。せし。らとむ。毒も生。ふと死か
 ふ。とま。く。かま。ふ。不。家。別。食
 乏。し。こ。洗。炮。や。せ。お。て。お。も。上
 糞。中。一。三。十。日。間。浸。れ。お。り。さ。ら。こ。後。者
 皮。境。裏。なる。又。ん。ぐ。里。蜂。蟻。の。ごと。く。乾。り
 生。く。と。夕。夕。不。死。ぬ。る。命。な。し。せ。し。世。と。ん
 の。苦。を。あ。ま。り。き。ふ。海。に。ひ。我。が。命。

小千代も生延る。是を明の謝摩御海を
 川と名づく見あり。五雜組のふ青物と名づく
 世と名づく。せめて。病。の。よ。か。ら。た。と。り。
 雲。霧。乃。中。男。を。命。と。の。と。く。と。ま。き
 け。ま。鶴。こ。ま。り。る。を。か。れ。海。ひ。り。く。を。小
 治。ま。る。能。あ。ま。り。も。本。系。と。し。鼓。脹。臍。疝。を
 治。ま。る。能。あ。ま。り。も。臭。と。取。能。不。と。小。世。と。ん
 月。ひ。ま。只。生。か。ら。若。む。む。し。そ。か。れ。と。世。と
 の。小。鬼。一。命。を。た。す。け。て。人。の。命。殺。さ。る。が
 海。に。流。す。い。う。経。生。延。び。た。ら。た。な。鳥。羽

玉の園海一海のしらべ、あゝ。その時鳥
 とゆらむとらるや。ぐあくとる。形さるぬ。い時
 我を年ごゆらふた。さる人。欲と悟らぬ。想
 おく。世と人。然る。浦山。安る。の。も。た。し。
 今。鶴。鳥。が。同。言。と。ず。あ。は。も。り。才。に。つ。く。さ。ま。は。
 その。文。の。若。樂。は。け。ら。れ。な。さ。ず。人。う。て。る。か。
 く。の。こ。も。く。が。人。を。樂。に。あ。そ。ぶ。と。も。も。あ。い。
 れ。亦。若。ら。る。人。あ。ら。が。の。人。若。り。む。ら。う。と。
 お。も。く。た。じ。ひ。の。介。た。の。先。る。今。と。秋。も。意。
 お。老。子。の。道。に。く。も。学。び。養。生。の。道。も。い。ひ。

かむ。と。生。を。も。く。な。く。の。た。け。と。す。べ。し。
 こ。も。ひ。ら。ら。い。やく。仁。人。を。我。ホ。ぐ。亦。ら。う。こ。う。ら。
 な。む。程。樂。か。こ。も。志。を。使。今。は。外。の。た。の。こ。
 と。い。や。あ。い。り。も。も。養。生。に。成。成。さ。品。を。掃。なら。
 い。川。を。鳥。鶴。が。見。識。乃。こ。も。く。人。を。た。あ。ふ。身。と。
 旁。を。く。死。あ。ん。も。海。な。ま。は。や。は。亦。い。う。あ。ん。こ。
 た。づ。り。け。ま。は。ん。生。こ。も。く。い。く。あ。せ。せ。ま。い。
 了。簡。か。士。農。工。商。も。小。人。の。為。不。勞。む。ら。ふ。
 にて。實。ハ。我。為。不。勞。む。ら。ら。何。を。能。く。求。て。
 昔。も。な。り。こ。小。勞。せん。り。道。不。行。く。ん。命。は。也。短。也。

ちうらひなり。命は今もあつて後又有年も生延
んじ知れずやとげしや川と毒く免悟志の志
世情不迷ふとある處に

胡椒非本之章

此種なたる人の所行たるふ好良思ふは
何れけきを水を川と流るる則侍女物
吾んと志りふ亭を擧乃たきも胡椒を粒
取がしん是を食してその上ふれりとの海
魚水毒を解し暑氣を拂ふと云ける故
則食し水と吾れたりと存ふ醫者一人存

命也多し我を知らるるをたいて言ふる
越えんと思ひ胡椒を物本は實ふは又
胡椒実めてゆやと尋りて彼醫者言ふ胡椒
胡椒紅毛圓より流るる木の實にこれ家
ことき醫者言ふる者なき事を知る
に醫者若れ身として扱ふ味味成りか
成醫者の薬用なりん元々ことなりとい
先生はいよく胡椒薬にも用ひ殊ふ日用
食料なきに醫者の身として木の實を
胡椒桐なりと志るは日本の俗多く本は實と

云傳不唐にても本なりや。唐本
 草木木の初小入る。その後李時珍と疑くま
 少や果れ部小今く。蜀椒葉葉本類の中よ
 載らる。志多きも時珍が説、全く葉に見く。中
 按ず。胡椒元より中華にひかき。物中て。唐
 陀國南番木の天竺地より来る。唐人も
 中傳人の説中て書物にも書のみ。一史志が
 一理あり。唐の玄奘三藏の西域記と云れ。天竺
 阿叱鞞國よ出胡椒樹樹葉若蜀椒と載た。巴
 華人の云小及む。日本に樹なり。と云く。

たり。もと唐く考む。天竺にて胡椒小本。二種
 二種あり。知れ。日本にも秋小本。秋葉とて
 二種あり。理と辨す。秋小本。秋葉とて
 相類と云ふ。とり。胡椒と人。と云く。蔓草に
 山羊に似る。葉なり。と云く。相類あり。根を
 鬼乃其葉と見ふ。芒寅の間と鬼門と云く。此
 こそ類小本の角と載す。犢鼻禪と虎の皮と志
 めさ。た。是も。理。と云く。相類あり。鬼門
 卯辰の間なり。鬼れ皮と犢鼻禪に。と云く。理
 少。考。ゆ。鬼の衣。小。鬼れ皮。

弱くて不相應なり

祇園氏紋之章

或人ありりるふ胡氏との不和と調志とを食
けをむかの老い頼む志かすしけちくを
我ハ祇園の氏子にそ。辨ふ奈禊の申りまは
別志と後りりるふ。我ハ
一頼む祇園の氏子にそ。食ハさるゆ。天
下一統の夏にそ。我もす及ぬ信。此ハを
そ胡氏と氏子の食ふをい。成夏にそ。雲
蓋鳥尊乃そ。後りりるふ。我ハ

らる事にはと。我ハ何も知りゆ。子も
みかく。忘る者我も忘りありと。我ハ
そ。辨ふ。時ふ。食。我ハ
海。胡氏と。我ハ。祇園
興。小氏の紋乃。信長。乃。我ハ
公。辨ふ。則。信長。の。我ハ
も。一。乃。切。胡氏。と
馬。正。天皇。の。我ハ
海。産。湯。の。我ハ

邦老子 卷二 十一

ちひの花を今の虎杖あり故ふりどら乃
 花を代へ祇寔の社司付ある者同く形を去
 此の級とあやまる由。去る時二方にいふこと
 へゆりもいふなり。たとひさうり祇寔の御紋
 に來よ。氏子と食つんゆい成程ふりて愈
 甲ゆふべや。志は福を乃神像と見るふ。元
 人福と名ひ。末社の神さく白狐と福とくま
 たる像と何とせり。胡瓜と足指を意す。さ
 理なり。いありの氏子、さか米と食ふはさ
 やん得ん。ちうさ頃と何る人來りていふ。家

け程懶ひあるが。醫者の中はかうなると禁ぶ宛
 於夕用ひるを。病瘳ゆべしと。あつたおれ一代の
 守を名虚空をゆて。うかぶ。改めゆい。うす
 倉と相候ふありたる由。家こふい。た。虚
 空をのうなを。と衆生の食ふと。あ。改。嘗て
 知もといへとも。せん當前。理と。い。ん。食
 むい。考。する。ゆ。持。病。年。の。ゆ。か。さ。バ。不。速
 用ひら。を。を。理。い。ん。と。い。ふ。さ。さ。も。食。の。理。あ
 ら。守。な。る。毎。ふ。い。の。き。も。一。種。宛。何。る。人。さ。ふ。こ。く
 う。さ。う。と。八。樓。乃。旭。の。た。陽。り。忌。む。食。相。ん

けぞ。こまも。堀氏のころく。石造おく。うらぶ。や
 原び。ゆる。ましく。吟味。お。一。万。事。本。末。を。を
 年。浮。え。た。お。遠。く。多。く。物。を。ら。楠。正。成。が。後。に
 井。も。た。た。た。は。の。末。まで。山。安。乃。花。の。水。不。流。く
 飛。ち。ら。と。い。り。の。こ。ろ。あ。ら。ら。葉。を。と。人。は。覚。え。ら

雷火電光之章

雷といふ。お。き。ら。ま。合。点。の。ゆ。ぬ。り。及。救。年。の。怒
 る。古。書。に。い。つ。ま。も。陰。陽。の。せ。ゆ。り。て。養。ふ。と
 の。こ。ろ。あ。ら。ら。と。一。く。端。ト。た。ら。説。解。を。さ。は。は。先
 生。も。さ。ら。と。と。い。ひ。問。ひ。の。せ。は。こ。ろ。と。い。う。く

惑。も。知。使。む。一。博。識。の。人。不。居。に。こ。ろ。と
 い。え。る。ハ。先。汝。の。後。乃。時。く。あ。る。ハ。後。理。を。お。く
 鳴。古。文。に。也。辨。へ。知。ま。る。也。と。平。何。も。も。理。を
 知。り。次。と。こ。ろ。と。ふ。さ。ま。我。が。身。の。中。に。理。を。知。ま。る。さ
 き。ふ。海。へ。て。廣。大。の。天。地。乃。理。い。う。く。知。る。一。也
 之。ら。ら。び。こ。ろ。と。一。理。有。べ。と。さ。ま。さ。と。も。の。中。に。り
 侍。り。る。と。く。袖。の。の。人。れ。為。り。あ。ら。後。に。し。は。泥。大。板
 原。省。庵。乃。説。き。く。あ。る。人。後。り。し。雷。地。氣。升
 る。時。地。中。に。焰。硝。硫。黄。は。身。雲。小。流。く。ま。て。海
 ぞ。ら。騰。り。し。た。時。天。氣。隨。て。驟。雨。と。なる。時。

中々変化して硝磺硫黄乃性とつじ
 たおふ太陽の天火ういまで忽ち造化の火
 鏡と成りたおふのありといつら。予按おれお
 い造化の火鏡と成りたるをいふ發明し也。和
 心の人は合点ままたと成る。西土も世
 意味少々察めせり也。方密之が天經或問を身
 於雷れ参之の文。略如硝磺と書たき。まこ
 らゆる意解ら。然もも火鏡のたとへれをま
 へ何ぞいふ。い雷火とこものむ獸ありて雷火と
 といふ。走里先づれ。秋多ら地中にかるを依を

上總の地方も秋を雷狩とて心と穿ち狩事
 あり。我西土にも國史補小曰雷州せり。亦小
 雷多くとく。秋ふゆりて地の中に、まを依を
 毛形塊のこさ。人取て食ふと載たき。和
 漢の事か。と見之。たら公羊傳に曰聲
 有と雷と云聲なりと。と電といふ電。今俗小箱
 光といふ電池。為時雲中れ。たら合ふて。い
 にも碎多。落らと見之。たら。故ふを落る。亦人小
 甚遠ひあり。かふ電といふ。物をかの雷れ。至りて
 細ふと。あたら雷火成る。

富士塩尻之章

松永貞徳のいづく。不二雪近年の連分有
 常乃こしく消れと春うし 袖雪と名をこするわ
 何やまらなを 詠諧ふら海士し 吾雜なら消ると
 けゆきとら (まごりお夏りり。宗祇宗長 雜
 せせりり。万葉集巻の三行。富士の根不階
 つむぎら氷正月乃とちの目消へくを 然ふ
 里ちり。しあ虚言ふすま 及理いあうし 次まこ
 梵灯菴の袖下抄にいづく。何ぞ乃雪雜なりり。
 海と急載式百四十六首の沖ふ雪方山乃雪六

多ふて何ぞ根不階の雜をあらんかりきり。
 軍乃根不階をいづく。初多と夏りりるを 蓋そ
 ろるべし。世故首とあきまら。又新撰菟波集に
 夏れ初ふ。宗伊法師とと種ハ山さくたく 何や
 せんけぬがうへなる何の初多い集、後柏原院
 の御宇宗祇法師の詔りりて。撰海をこる集
 りら。又伴勢物初ふ富士乃山の形を 志存あらん
 やうにめんをりるといし志存あらるといふ事 流
 多くあるといども。まぶらなるりて知も多くハ
 古傳ふとていづく。壺塩といふあ、尻小山の形



ゆるる。故ふ。塩尻といふは。藁塩乃。塩も。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。

三上山と名まらり。といは俗話もよく。ゆの形り。小
似る。山をかき。いふ。あり。又三上山と志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。
志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。志る。

三上山

三上山

載せり。五百年ち返ハ常ふ山のとふ燃る
 の月らし由阿佛のいさよひ日記母の山状
 こそ六燃もたむむし父の朝長ふさ終これ
 といふならむ此浦をまはせむとて
 川あまの玉まきみしはぬぐら燃る
 如夕たふ見へし物といの年らう縁し
 とやまはささふとて人たふかし誰がさふ
 なびふとてく富士乃根の燃るまのさ
 成らむと阿佛の徳たまふ阿佛一代のうら
 にあらわたりた報とてをり

都老子二終



